



第拾壹卷第一號

家庭と子供の躰け

會長 中川謙二郎

家庭と學校とは相俟つて始めて教育の効果が完ふせらるゝものであることは、今更事新らしく云ふ程のことではないが、併し、實際はいつ迄も新しい問題である。我國の家庭は未だ學校の教育を助長することに於ては極めて力が薄い。事の眞偽は知らないが新聞などの報導する所に因れば上流社會の家庭が殊に善くない様である。家庭が少しでも悪ければ學校の骨折は家庭で破壊されて仕舞ふ。殊に德育の如きは人倫道德の要旨其ものは學校に於て授けられはするものゝ、其實行的練習は何うしても家庭が根本である。或は、世には學校の價値を非常に豪らく見過ぎて居る人がある。何んでも學校へさへ遣つて置けば夫れで、もう、何の心配することも要らぬ。學校で學問さへ覺えて來れば夫れで人間は立派

に出來上るものと考へて居る人がある。そして家庭と云ふものが徳育上如何なる重要な位置にあるかと云ふこと、延いては兩親と云ふものが子供の徳育、殊に實行的徳育平たく云へば子供の躰け方の上に、如何なる大勢力を持つて居るものであるかと云ふことを一寸も自覺して居らぬかの様に見えるものがある。飛んでもない誤りである。學校が教育上大切なる位置にあると同時に家庭も亦同様に大切な位置を占めて居るものである。學校と家庭とは何うしても協力しなくては充分の効果をあげ得るものではない。

家庭が學校の仕事に共同し援助をする重要な點即ち家庭教育の最重要點は子供の躰である。躰と云ふのは所謂「仕付」或は「爲慣け」で有形的なる作法其他の行爲を始め無形的には正直親愛などの精神的傾向の爲し慣るゝ結果一つの習慣となるものを云ふので然る可く學校の教授と歩調を揃へて品性陶冶の上に貢獻しなければならぬものである。

然るに廣く世間の家庭の様子を見ると子供の躰にするのに或は寛大にして子供は成る可く其自然の儘に放任して置くが善い。なまじに子供の自由を妨げ其自然の發達を害ふことは面白からぬことであるといつて甚だしきは子供の放縱を許し其虚言や背信の所行さへも放任して置くものがあるかと思ふと一方には箸の上げ降しにも一々に干渉して事毎に抑制と注文とを發するものがある。斯る人は子供の力を認めて遣ると云ふことがないからして詰らぬ事迄も子供の爲に力を貸して遣る。轉んだと云つては起して遣り靴の紐が解けたと云つては結んで遣る。傍から見ると祖父母や兩親の愛が溢るゝ許り現はれて居る様で頗る美しき有様には見えるが、偕て其子供は果して如何なるものになるかと云ふと、自信なく依頼心強く、誠に意氣地なき弱行の人とより外はなれぬ。學校が如何に骨折つて意志の強固な自信力のある大丈夫を養成し様と思つても何の役にも立たぬことになつて

仕舞ふ。然ればと云ふて前者の様に全く子供の成り行くが儘に任かして何等の干渉も試みぬと云ふのも如何のものであらうか。我輩は餘り賛成が出来ぬ。成程、家庭に於ける子供は其他の何處に於けるよりも最く善く自然である。全く子供は家庭に於て最も善く天真爛漫なものである。此自然の有様、此天真爛漫は決して妄に破壊す可きではない。云ふ迄もなく妄に子供の行爲に干渉するとは決して子供を子供らしく幸福ならしむるものではなくて却つて之を苦しめ、之を不快ならしめて遂には之をして早熟せる小さき老人たらしむるものである。併しながら之が極端に行つて虚言を吐いても取締りをせず約束に背いても責むるものがないと云ふ様になつては其來る可き結果は實に寒心す可きものである。我輩は勿論、子供の自然の行動に干渉することを好むものではないが然りとて無論、絶體的放任論には不賛成である。然らば家庭に於ける子供の躰は如何に之を陶冶す可き

かと云ふに先づ大體に於て成る可く子供の自由を許し或度迄は自主自立を獎勵して自らの不可能なることの外は決して人手を借らざらしむると共に其行爲にして一朝虚言又は背信の如き不徳たるものか又は衛生上危害あるものならんには一歩も假借する所なく之を取締らんことを要す換言すれば子供の行爲は後來其子供を悪行爲に近かしむる恐あるか若しくは生理的危険ある者は顧慮する所なく之を嚴禁し善なき方面有益なる傾向は成る可く自然の發達に任ずを以て最も策の得たるものと信するのである。彼の上流の家庭に不甲斐なき子供を出すこと多きは餘りに嚴重なる干渉の結果にして、軍人の子供に放逸にして箸にも棒にも掛らぬ腕白ものを出すこと往々にして之あるは餘りに其家庭に於ける躰方を自由にしたるが爲めである。由來子供の理想的發達と云ふものは、何うしても悠然としてこせつかぬ中に眞面目で、正直でそして背信の所行、表裏ある様な行爲は如何にしても

出来ぬと云ふ様な堅固な道徳を有して居るものでなければならぬ、世の母親たるもの、希くは一段の奮發を以て此の如き完全なる發達を有する理想の子供を得られんことを。是れ決して吾輩一人の希望のみではない。實に國家社會の一大要求である。恐くは本誌を愛讀せらるゝ會員並に讀者諸君の要求と雖も之に反對せらるゝものはなからう。職に幼児教育に關係せらるゝ方々は常に此心を持つて幼児に對すると共に又常に此心を以て世の母親たるものに説き聞かせて。我國の幼児教育をして益々美ならしむると共に一層合理的に完全なるものたらしめんことに盡力あらんことを希望に絶えぬ。

久かたの月の桂も折るばかり

家の風をも吹かせてしかな

(道真母)

早蕨幼稚園の保育

早蕨幼稚園長 久留島武彦

私は、子供と云ふ者を研究するに參考として、子供の自由遊戯所と云ふやうなものをもつて見たいと云ふ望みで、此の園を開きました、そして、その遊んで居るのを見て、その特質を知り、如何に子供に話すべきか、如何に子供と楽しむ事が出来るかと云ふ事を実験する、申せば此の園は研究所で御座います。けれども、私の研究所は、他の児童心理を學問として研究せらるゝ方々の如き意味の研究所ではありませぬ。私に此の園をもたせてくれた人の考も、私の目的も、以上の如きであります。それで、保育上の意見と申ししても、白狀すれば、悪しからぬ方面に保育するといふことが、自分の責任と心得て居るばかりです。

保育實施の方針

けれども、そればかりでは、世間へ對して相すみ